

第6分科会

組 織 京 都 府

提 案 者 片 岡 倫 子 (千代川こども園)

「子どもと創る遊びの空間」

1. はじめに

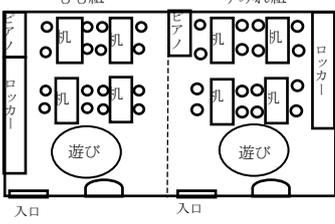
千代川こども園は、昭和42年に理事長の寺院の境内において定員30名の無認可で開園しました。翌年から亀岡市立簡易保育所となりましたが、亀岡市内が人口急増地域であったため、昭和50年5月に法人化して姉妹園を開園し、現在の地域に移転して定員120名の千代川保育園に改組して開園しました。平成30年度から幼保連携型認定こども園に移行し、現在、約200名が在園しています。当園の周辺には田畑が広がっていますが、幹線道路も近いため、地域には新興住宅街もあり、子育て世帯の転入も増えています。当園では、仏教の理念に基づきながら、子どもの健康なからだと豊かな心を育めるようにつとめています。

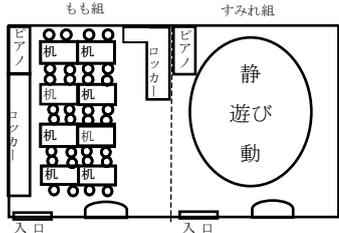
2. 研究の目的

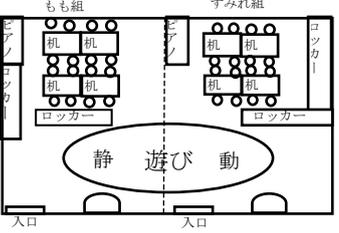
『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（平成29年告示）の総則には「保育教諭等は園児の主體的な活動が確保されるよう園児一人一人の行動の理解と予想に基づき計画的に環境を構成しなければならない」「保育教諭等は、園児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない」とあります。

これまでにも保育室内の環境を工夫することが大切だと考えて取り組んできました。各クラスでコーナーを設置したことから、時折「隣のお部屋で遊んでいいですか?」「〇〇くんと遊んできていい?」という声が子どもたちから聞こえてきました。ゴザを広げて玩具を出すという従来の遊び方では、遊んでいても時間になると、片付けることが当たり前になっていました。その時その場で夢中で遊んでいることが継続されていないことに気がつきました。また、継続性がないことから遊びを次から次へと変える姿もありました。そこで、「子ども一人一人の行動の理解と予想に基づき」という点と、「物的・空間的環境を構成する」という二点に焦点を当て、自由遊びの充実化と遊びの継続を目指して、空間的環境を見直しました。具体的には、年中児2クラスの間にある保育室の仕切りを開け放ち、生活と遊びの空間の工夫や、広く遊べる場の工夫、隣のクラスという子どもの概念をなくす工夫などに取り組みました。

3. 取り組みの過程と結果

<p>I 期(4月~9月) 探索する子どもたち</p>	<p>【空間的環境】</p> <ul style="list-style-type: none">各クラスで、それぞれ遊びのコーナーを用意する。遊びの時間にはゴザを出して種類のブロックを皆で遊ぶようにする。様々なことに興味をもってもらおうと机上で遊べるコマや大工道具、小さな人形等を用意する。 
<p>【ねらい】</p> <ul style="list-style-type: none">クラスの友達に慣れ安心して過ごす。いろいろな遊びを経験し、自分の興味のあるものを選んで遊ぶ。保育室内の過ごし方やそれぞれの玩具の使い方や遊び方を知る。	<p>【子どもの姿】</p> <p>いろいろな遊びに興味を持ち、選ぶ楽しさを味わいながら、お気に入りを見つけていく。仲のよい友達と同じ遊びをすることで安心したり、楽しく会話をしたりして過ごしている。</p>
<p>【まとめ】</p> <p>遊びを次から次へと変え、一つの遊びを継続できない子どもの姿が気になり、環境に変化をもたせようと考え、部屋の環境を変える前に遊びの場を子どもと一緒に考えた。</p>	

<p align="center">Ⅱ期(10月) 活気あふれる子どもたち</p>	<p>【空間的環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2クラスの仕切りを開放し、朝の挨拶や食事をする空間と玩具遊びや表現を自由に過ごせる空間に分ける。 ・入り口側に動きのある遊び、部屋の奥に静かな遊びを用意する。 ・子どもの意見を取り入れた遊びのコーナーづくりをする。 ・一つの玩具に向き合いとことん遊び、友達と遊びを共有できるようにゴザを敷いてスペースをつくる。 
<p>【子どもの姿】</p> <p>子どもたちが「好きな遊び」「したいこと」を自分で選び、一つの遊びにじっくりと取り組むことができるようになった。失敗をしても繰り返して挑戦する姿が見られ、集中して遊ぶ中で、一つ一つの玩具の特徴と遊び方を理解する。遊びを楽しむ姿が見られ、続きを楽しむにやる気持ちも生まれてきた。</p>	
<p>【まとめ】</p> <p>仕切りを開放し、生活の空間と遊びの空間を大きく分けて環境設定することで、遊びの選択肢を増やすことができた。また以前は隣のクラスに行くことや友達と遊ぶことにためらいがあったが、遊びの空間をつくることによって、同じ興味、同じ目的をもった気の合う友達と遊ぶことができるようになった。そうして遊びに夢中になっていくことで遊びを継続させたい気持ちが強くなり「つづきます」カードを作った。遊びが充実していく一方で生活空間において落ちつく時間や気持ちの切り替えがしにくくなってきた。今の遊びの空間の雰囲気を残しながらも各クラスの生活の空間がもてるように考えていく。</p>	

<p align="center">Ⅲ期(11月～12月) 遊びを創り出す子どもたち</p>	<p>【空間的環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活の空間はクラスで分け、自由遊びの時間は一緒に過ごせるような空間にする。 ・Ⅱ期につづき、遊びの空間は動きのある遊びと静かな遊びに分ける。 ・お互いの遊びを認め合い、それぞれのスペースを自分たちでつくることのできるよう、ゴザは使いたいときにあせるところに置いておく。 
<p>【子どもの姿】</p> <p>自分たちで考えて遊べるようになり、日々続けてきた遊びが発展し夢中になっている姿も多く見られるようになってきた。今まで興味を示すことのなかった遊びや友達のしていることに関心をもち、自分の遊びに取り入れたり、互いの遊びが発展したりするという相乗効果も出てきた。</p>	
<p>【まとめ】</p> <p>生活場面ではクラスを分け、合同で遊べる空間を残したことで、遊びと生活の時間の切り替えができ、遊びの時間を集中して過ごせるようになる。Ⅱ期の玩具の特徴と遊び方を理解した経験が静と動の遊びを区別する意識に繋がり、遊ぶ場所を工夫しようとしていた。周りの遊び方に関心をもち、互いの遊びを尊重できる優しい気持ちが育まれたことによって遊びの空間を自分たちでつくり出せるようになった。</p>	

Ⅱ期

積んで遊ぶ

- (育まれた姿)
- ◎自立心
 - ◎協同性
 - ◎豊かな感性と表現



あいている好きなスペースで遊びを始め、自分なりに試行錯誤しながら板の積み木やウレタンブロックを積んでいました。写真を見ながら積み方を真似たり、友達に聞いてみたりしながら工夫して何度も挑戦する姿がありました。子どもたちの「残しておいてほしい」という言葉を受け止め、『つづきます』『こわさないでね』カードを作りました。翌日に続けられるようになったことで、やってみようとする気持ちや、明日を楽しみにする気持ちに繋がりました。

創造・想像して遊ぶ

- (育まれた姿)
- ◎思考力の芽生え
 - ◎自然との関わり・生命尊重
 - ◎数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚



机を壁に向けて折り紙コーナーをつくったり、段ボールで囲いのある図書室を作ったり、落ち着ける場所ができたことで、一人で集中できる時間をつくることにも繋がりました。そのことで、一つのことにとことん向き合えるようになり、できるようになったこと、気付いたこと、知ったことを友だちに教えようとしていました。さらに、自分の言葉で伝えられた時の満足感や、友達とできたことを喜び、一緒に向き合うことの楽しさを感じていました。

なりきって遊ぶ

- (育まれた姿)
- ◎社会生活との関わり
 - ◎言葉による伝え合い
 - ◎数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚



電車ごっこはままごとでは段ボールや牛乳パック、色画用紙を用いて必要なものを作っていました。作るうちに早く遊びたい気持ちがかみ上げ、連日子どもたちは常に誰かになりきって楽しんでいます。電車ごっこでは運転士、駅のホームで待つ乗客、踏切役、ままごとでは、お父さんやお母さんになって、友達との関わりを楽しんでいました。自分たちで作った駅員さんの帽子を被ったり、エプロンを身につけたりし、それぞれの役になりきって一つの空間をつくり上げる楽しさを感じています。子どもの楽しさと比例してままごとコーナーにはアイテムも増え、子どもたちのオリジナルキッチンができ、廊下には電車の線路がどんどん伸びていきました。

Ⅲ期

積む

- (育まれた姿)
- ◎協同性
 - ◎思考力の芽生え



遊びの楽しさを伝えたいと、友達を誘う姿が多くなりました。役割を決めてはいませんが、椅子に乗ってブロックを積む人、倒れないように支える人、ブロックを渡す人などうまく分担し、交代しながらどんどん高く積み上げることを楽しんでいます。机の上で遊んでいた小さな木片玩具を床から積み上げてみようとし、何度も倒れ、崩れましたが、根気よく続け、壁を利用して積み上げることを思いついたり、最後の一個を誰が積むかを相談し、皆で見守ったりするなど、協力する姿もみられるようになりました。

ごっこ遊び

- (育まれた姿)
- ◎協同性
 - ◎社会生活との関わり
 - ◎言葉による伝え合い



手作り看板と、ブロックで積んだカウンターに、廃材を利用して作ったジュース、やきそば、お寿司、季節外れのかき氷等を並べ、お客さんと呼びこみます。ままごとをしていた友達がお客さんになり、買い物をして帰った先には、かわいい家族が待っていてみんなで食べていました。同じ保育室内ではありますが、同じ場ではない隣同士でもない、「一緒に遊ぼう」と約束もしていないのに、互いの遊びに興味をもつことで二つの遊びを成立させていました。ただ単に遊びを繰り返すのではなく、進化と融合を経て、ごっこ遊びへと展開しています。

車を走らせる

- (育まれた姿)
- ◎道徳性・規範意識の芽生え
 - ◎数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚



積む遊びを繰り返し経験したことで、道や建物を作り、あっという間に街ができていきました。遊びの輪が広がり個々で遊んでいた積み木やブロック遊びが融合しました。ブロックで作った車を走らせたり、高く長い坂道やガタガタ道をどうやって作ろうかと楽しそうに話し合ったりもしていました。三角のウレタンブロックを土台にして坂にし、上に板の積み木を並べるとすべりが良くなることに気がつくやと車を上から滑らせるだけではなくのぼらせることも楽しんでいました。

4. まとめ

今回、保育室を合同にして空間的環境に変化を持たせ、子どもたちの遊びを追ってみました。

Ⅱ期（10月）は、「仕切りを開放し保育室を合同にして、朝の挨拶や食事をする空間と玩具遊びや表現を自由に過ごせる空間に分ける」「遊びの選択肢を増やす」ことで、「好きな遊び」「したいこと」を自分で選び、一つの遊びにじっくりと取り組むことができるようになってきました。しかし、新しいことに挑戦すると、課題も生まれてきます。たとえば、子どもたちが明日の遊びを楽しく思えるように、「つづきます」カードを作ると、続きをすることと片付けをしないことが混同し、玩具などを出しっぱなしにしたり、廃材遊びのコーナーではゴミの分別ができなかったり、折り紙を途中で諦めてそのままゴミ箱に捨てていたり、と悲しい出来事もありました。

Ⅲ期（11月～12月）は、「合同で過ごす時間と共に各クラスでの活動も視野に入れた空間づくり」を工夫することで、様々な場所で、日々続けてきた遊びが発展したり、今まで興味を示すことのなかった遊びや友達のしていることに興味をもったりする姿を見ることができ、自分たちで考えて遊べるようになってきました。遊びの終わりには片付けるものと残しておくものを自分たちで考え、みんなで決めて整理整頓し、「これは残しといてあげようね」「これはもういらない？」などの会話も聞こえるようになってきました。

このように、「好きな遊び」を自分で選ぶことで、自然と気の合う仲間が集まり、遊びがどんどん発展し、互いに認め合ったり励まし合ったりするにぎやかな声と笑顔がたくさん見られるようになりました。また机上では心を落ち着かせて目の前のことに集中しようとする姿がありました。折り紙では本を見て折ろうとしたり、できるようになったことを何度も繰り返すことで自分のものにしたたり、それを友達に教えようとする姿が増え、とても上達していきました。どちらにも共通して言えるのは一つの遊びにじっくり取り組めるようになってきたことだと感じています。これは今までと明らかに変わった姿と言えます。さらに、見通しや意欲がもてたり、失敗しても何度でも挑戦したりする気持ちが育っていました。楽しく遊ぶために玩具や道具を大切に扱う姿や、友達に対しての優しい気持ちも見ることができました。それにより私たちも気持ちのゆとりが生まれ、子どもたち一人一人の遊びの姿を受けとめ、見守ることができるようにもなりました。

以上のまとめとして、空間的な環境を変えてそれぞれ別々にあったコーナーをまとめることは、同じ広さでも遊びを共有する友達が増え、会話が活発になったり協力したりするという空間を生み出しました。今まであったものを新鮮に感じたり、友達のしていることに興味・関心を示し、関わりをもったり、自分の遊びに取り入れたりするなどの相乗効果も見られ、物的・人的環境にも結びついてきたことが成果だと考えられます。

5. 研究の結果を踏まえて、今後意識していきたいこと

環境の再構成をするたびに新たな課題も発生しますが、豊かな感性や柔軟な発想、「してもいい」という安心感を育てたいという思いは『私たち保育者が子どもの育ちにおいて、とても重要な役割を担っている』ことを常に意識して毎日の保育を振り返ることが大切なのだと感じています。

今回の研究の中で得た学びや経験を、他のクラスや異年齢児で過ごす時間にも取り入れることで、また違った遊びの変化や子どもたちの育ちを感じることができるのではないかと期待をもちました。

これからも日々の保育を見直しながら、保育環境を工夫していきたいと思えます。